

神話の語りと祭式

松前健

神話と祭祀儀式との関係を論じるに当って、先ず考えて置かなければならないのは、神話とは何かという定義づけの問題である。

神話が祭式と結びついたかどうかということの論議も、その「神話」の適用範囲を、どの程度までに留めているかによって、変わって来る。ある種の伝説や昔話、俗信などまでこれに含まれている人には、もちろんその結びつきなどは、否定されるべきものであると思われるが、いわゆる「神話」といわれる中でも、特別に聖別された聖性神話のみを「神話」だと考えている人には、神話と祭式の二書は切り離せないものと考えられるのは当然である。

これは、文筆に記載された、いわゆる古典神話、例えば日本神話やギリシャ・ローマ神話などもかかわって来る問題である。

M・P・ニルスンや、G・S・カークなどの、古典学者の神話観は、一般に、ホメロスなどの文学的な英雄叙事詩まで、これに含ませているため、祭式との結びつきを否定したのは当然であるし、またマリノウスキー、イエンゼン、エリアーデのような、人類学・宗教学者が、未開民族などに見える、特別に聖別された口承説話だけを、神話と見なしているため、両者の相即関係を肯定したのも、当然のことである。従って、先ず定義とその語の適用範囲を限定してから、両者の関係を論じなければ、話は何時までもどうどう巡りとなってしまおうのである。

私自身は、神話の定義を、やや広い立場で考えて来ている。つまり、宇宙・自然・人間・文化などの起源を、超自然的な神や精霊に帰している説話であり、その内容が堅く信じられていたもの」という程度で十分であり、従って、口承のものも書承のものも含まれるものと考えている。

この立場から言えば、詩人や戯曲家の手によるものが多いギリシア神話も、政治的意図を多く含まれているという日本神話も、共にこれに含まれるのである。従って、これらが祭祀儀礼との結びつきがあったかどうかを考えること自体、無意味なことである。

ニルスンは、ギリシア神話には、何等の祭式とも無関係な、都市国家同志の政治的な葛藤や勢力争いから出た政治神話も、数多く存在することを挙げたし、カークや、フォンテンローズらの、いわゆる「反儀礼主義者」たちの古典学者は、ハリソンや、フレーザらの「儀礼主義者」たちが説いた、神話と祭式との併行・結合の説を、批判し、そのドグマを打破しようとしてきたのである。

私もこれに対し、多大の共鳴を感じている。確かに、神話の定義を、広く考えるとき、一切の神話が、かつて祭式と結びついていたとか、祭式から引き出されたというような説は、問題にならないことは事実である。

未開民族にも、彼等の自然に関する説明神話が沢山あり、これら

は、必ずしも祭祀儀礼を伴っていたとは限らない。クラックホーンらが述べているように、祭式を伴わぬ神話も数多く存するとともに、神話を伴わぬ祭式も数多く存し、両者はもともと別の起源のものである。

然し、ここで、この「祭祀儀礼」ないし「祭式」などということばの意味をも、もう一度検討して見る必要がある。一般に、この語の内容についても、きわめて不明瞭であり、漠然と、「神話の筋書き通りのことを、所作で演じるもの」という風に考えているにすぎない。

確かに、創造神話などを、祭りのときに、司祭らがドラマ的に演じるような、祭式劇は、古代バビロニアやエジプトなどのオリエント世界では盛んに行われたことは事実であるし、また一方、未開民族の祭りや、イニシエーションのときに、同様な原古の神話的事件を、身振り所作で表わす祭式劇が行われていることは、事実である。

フック、ガスター、ホカートらのいわゆる「神話・祭式」学派が、古代オリエントの新年祭や、王権祭式に、そうした祭式劇の存在を認め、一定の範型を持つ王権祭式が神話とともに、周辺の諸族に伝わったことを推察し、神話と祭式との関係の究明に、大きな指標を見出そうとしたことが知られている。

然し、それとともにどんな神話にも、かつて一種の祭式ドラマが伴っていた」というような、ラグランや、ハイマンなどの極端な「儀礼主義」学説が出て来て、その方向を推進させたのである。

ここで、フオンテンローズやカークなどの烈しい批判が打出され、儀礼主義は、「凋落した」という印象を、学界で受け止めたのである。彼等が批判したのは、ハリソンが唱えた、古代ギリシアの

春祭論や、フレージャーの「祭りにおける王殺し」の説であり、またこれらに立脚したラグランらの原始祭式論であった。

彼等の批判は、概ね正しいが、ただ少し、「反対のための反対」というような印象があることは、いなめない。未開民族の中の聖性神話は、濠洲アランダ族のインテイチユマ儀礼や、セラム島のハイヌウエレ神話などのように、一種の祭式ドラマを伴うこともあることは、事実であり、イエンゼン、エリアーデなども、この相即を認めては、フランクフォートなども、「神話・祭式」派の公式主義には反対したが、オリエント祭式の存在は、認めている。

フオンテンローズらの学説は、一面にアメリカ人特有の、公式主義・画一主義・ドグマ主義に対する懐疑から出て居り、その儀礼主義批判には耳を傾けなければいけないが、多少ひとりよがりの強引さが見られることは、知らねばならない。その例が、バビロニアの新年祭アキツにおける、神話と祭式との関係などに見られる。祭りに口唱された創世詩エヌマエリッシュは、何の演技も伴わなかつたとか、この祭りに演じられる日神マルドックの岩隠れと復話のドラマは、神話が現在残っていない、等々の理由で、これらのオリエントの祭りは、神話とは何も関係はないのだ、というような論法である。これらをもつてカークなどは、神話と儀礼との結びつきを否定する「完璧な指摘」であると称揚したのである。

然し、ここで、「神話と祭式の結びつき」については、必ずしも、「神話の筋書きを、身振りとして表わすもの」が祭式であるということを意味しないことを知らねばならない。そうした身振り儀礼が、神話と常に結びついたということは、確かに否定するべきものであろう。

然し、このことは、一般に聖性神話が祭祀と結びついていたとい

うことを否定する論拠にはならない。別に、身振り所作は伴なわなくても、単に祭りの儀礼の一部として諷誦するだけでも、儀礼・祭式なのである。祭りにおいて、聖性神話が儀礼的に口唱されるというのは、世界的にも広く、こうした「祭祀と神話の結合」を、一般化した公理として考えようとする傾向は、欧米学界でも、決して、凋落した考えではない。

日本古代でも語部が大嘗祭に、古詞を奏上したことが知られる。

折口信夫は、祭りにおける神の託語から、やがて三人称の神の叙事詞である神話（折口は「神話」という語を使わない）が発達したと説き、柳田国男も、同様に、ミコの託語が神話になったと説き、また定まった時と処で、敵爾に語るものが神話であると説いた。これらはみな祭祀の神話との結びつきを、積極的に論じようとしている。

然し、神話が祭りと結びついていたことは、推定できても、託語から神話が出たということまで、系統づけることは、いささか問題であろう。古典を徴しても、託語は必ずしも神話を含んではない。中古や中世の託宣集には、神託の語には、それほど長々と神話を語り、神の素性を述べ立てるといふ例は見られない。

東北地方のイタコの神降しにも、祭りのさい、イタコがオシラ神を手にして、オシラ祭文を語るが、神口や死口の口寄せは、別に行い、オシラ祭文語りとは別である。オシラ祭文は、神の素性を語る、いわば神話であるが、これは一人称ではなく、三人称の語り物である。古代の語部の語る古詞の内容は判らぬが、もし、折口信夫の説くように、『古事記』の「神語」や「天語歌」などが、これらの語ったものであるとすれば、これらは一種の「神事的歌謡」であるかも知れないが、決して「託語」ではない。

創世神話を、諷誦するのは、季節的な祭祀ばかりでなく、冠婚葬祭の人生儀礼、病氣治療、建築儀礼、漁撈儀礼などにも行われたことは、エリアーデや、B・C・スプロウエルなどの詳細な研究がある。何れもその原義は、これを口唱することにより、「原古の原型への回帰」が行われるのである。こうした生きた機能の残っている神話を、ファン・デル・レーウなどは、「生きている神話」と呼んだ。

然し、この「生きている神話」も、託宣とは全く別である。

日本の古典神話が、その最後のな結果の形として、『記紀』に記載されたのは、多くの文筆的な操作によるものであるが、その処々に、例えば天石窟戸の段とか国生みの段のオノゴロ鳥生成の神話などのように、明らかに一種の「口承による語り」の部分らしきものが散見することなどでも、これらをもと「祭式的口誦」によって語られた痕跡があると言えよう。また諸家が論じるように、天石窟神話と鎮魂祭、イザナギの黄泉国下りと道饗祭イザナミの焼死と鎮火祭、天孫降臨と大嘗祭というように、重要な神話のモチーフと、宮廷の祭祀儀礼とは、固く結びついていた。これを否定することは、不可能である。

私は、一九八一年の夏八月中旬に、韓国に渡り、十日ばかりかけて、ソウルや済州島のシヤマンの祭を見て来た。済州島における神房の祭を、済州大学の玄容駿教授の案内で見学させて頂いたが、ここで神話と祭式との結合を、この目で見えて来たのである。

ここでは、村の神の祭りである堂祭や、個人の家祭や病氣治療や子授けを祈る願かけ祭りなど、どんな行事でも、神房という巫（多くは男ミコ）がこれにあずかる。

この祭次の初めは、初監祭といひ、神迎えの儀であるが、このと

き首神房は、天地の分離、日月星辰の發生、山水、国土の形成、人間の誕生、火食や農業の始まり等々を語る創世神話が口唱される。

神房はソウルの巫女のように、最初から華美な神装を着るのではなく、笠に長衣という普通の礼装で、最初板の間(マル)に設けられた祭壇の前で、四拝し、次に長々と「天地のはじまり」の歌を、諷誦する。これを「ペーポーチーム」と呼ぶ。一くぎり終ると、舞をし、舞い終ると、また一くぎり語る、という形で、語り、かつ舞うのである。

最初は天地開闢から始まり、神々の系譜に及び、しだいに地域的にしぼられて、この賽神を行う場所や日時を挙げ、祭りの目的を述べ、願主の名、病人の名などを告げる。

次に神迎え、すなわち請神であるが、先ず「神門開き」という歌唱と舞を行い、来臨する神靈の道の邪氣をはらい、祭壇を鎮める所作を行う。

招かれる神は、決して一柱ではなく、一万八千柱という沢山の神々が迎えられる。この神迎えが済むと、供物を神に進める祈り、次に神意が嘉納したかどうかを卜する「神刀占」、神と人が俱に楽しむ一同の踊りがあり、初監祭は終る。次の初神迎、再請神という祭次では(初監祭で洩れ落ちた神々の神迎えの行事があり、ここでも再び「天地のはじまり」の巫歌と踊りがくりかえされる。

こうした一般祭次が終ると、この祭りの目的の個別儀礼に移る。祭壇は家の外の庭に移され、天幕が張られ、地面にゴザが敷かれ、その上で神房が、祭りと歌舞を行うのである。

ここでも、天地開闢神話が改めてくりかえされる。最初が子祈りの行事である「仏道迎」で、この日の賽神の目的であった。

賽神は、漁夫の末亡人が、三十五歳になる病弱な息子の健康回復

のためのものであった。子供の寿命の守り神である産神を呼び出して、これに生命安全を祈るのである。

この神話の口唱が終ると、道掃除といって、産神の来臨する道を掃除し、草木や石を取り除く所作を行う。これが終ると、巫祖本解というミコの元祖の神の本縁を語る神話の口唱がある。この次に、この神を迎える巫祖(初公)迎がある。次に、西天の花畑の生命の花を掌る二公という神の本縁譚「二公本解」と、それを迎える「二公迎」、前世を掌る神の物語である「三公本解」と「三公迎」が続く、これに地獄の十王を迎える神話とその神迎え、農畜神の神話である「世経本解」、この神を遊ばせる「世経ノリ」、村の神である「本郷神迎」など、多くの神々を次々に迎える祭る。

最後に、これらの神々を一斉に送り出す「送神」がある。送るときは一斉に行う。

ここでいう「本解」とは、日本流に言えば、神の本縁譚であり、神の来歴譚である。神々を呼び出すに当って、この本解を諷誦すると神靈は祭りの場に出なければならなくなるといわれる。この素性を語るのと、神は喜びなごみ、祭りの場に降臨する気になるといふ。つまりこの本地譚は、神を呼び出すための呼び出し状のようなものである。

又、全体の祭りの始めに歌われる「天地の始め」の口唱も、一万八千柱の神々を呼び出すための呪術であるといわれる。これを繰返すことは、洩れなく、この祭りに降魔させるためといわれる。張鶴根氏などは、濟州島では昔、立春祭のさい、耕作や播種などの予祝儀礼を、神房たちが行なった後、賽神に入り、その冒頭に、「天地のはじめ」を語ったという。季節祭に創世神話の口唱する古代祭式の遺風である。

このような神の素性語りは、韓国本土にも行われたらしく、ソウル地方の死霊祭における、鉢里公主(捨姫)の祭文に残っている。

これらは、一般に三人称の叙事詩であり、託語とは異なっている。神の本縁を語る神房は、彼自身が神ではなくして、神に対して、その素性を語り、かつ祈りかける司霊者なのである。神話は、人間が神に語りかけるものであり、神自身が人間に語りかける託語とは異なるものである。託語は濟州島でも行われるが、こうした神の素性語りや、神迎え、また神饌の供進などが終わった後、最後に神がこの接待を感じて、神託を行うのである。これをブンサレムという。神迎えの色々な行事をすませてはじめて、神霊は降下し、その意志を、人々に伝えるわけである。

このように見ると、神話と祭りとは密接に結びついている。この濟州島の本解の中の、「三公本解」は、日本のイモ掘り長者譚と同型の説話で、『三国遺事』の薯童の説話と同じく、もと民間起源のものであったものが、これがこの祭次に採り上げられて、祭儀神話となったのである。もと昔話であったものが祭りに諷誦され、神の前歴譚とされると、神話となるのである。この辺りに、神話と祭式との古いつながりが、掘りおこされて来ると考えられる。

(まつまえ たけし・立命館大学)

『口承文藝研究』在庫誌(各千円)

第一号

散文伝承の構造……………関 敬吾
語り物の民衆藝能化……………三隅 治雄

〔書評〕

関敬吾著『日本の昔話—比較研究序説』を読む……………小沢 俊夫

『日本民謡大観』九州篇(北部)……………友久 武文

……………小島 美子

第二号

異郷訪問譚の構造……………大林 太良

神哥の系譜……………本田 安次

新潟県北部に於ける昔話の伝承……………大嶋 善孝

譬女唄をめぐる二、三の問題……………佐久間惇一

『金持百姓と貧乏百姓』(AT1535)について……………竹原 威滋

盆踊口説『ときは御前』について……………成田 守

昔話を追って……………水沢 謙一

筑後川河口の昔話……………宮地 武彦

南島の民間説話研究の当面する二、三の諸問題……………山下 欣一

〔書評〕

三隅治雄著『芸能史の民俗的研究』……………後藤 淑

……………萩原 龍夫